

泰西学館に関する一考察

谷岡学園・大阪商業大学一二〇年の地下水脈

田崎 公 司

はじめに

大阪商業大学谷岡記念館前の四本並ぶ門柱の向かって左の一本には、大阪商業大学や付属高等学校のものと並んで、やや白っぽい「泰西学館」の石札が掲げられている。

泰西学館とは、「秘められていた東洋風の異色名門私学」^①とよばれ、明治十八（一八八五）年五月五日の端午の節句の日に創立された大阪の男子私学校である。二〇年前までは、「いつ、だれらが、どのような男子泰西学館と共に歩んだか、そのすべてを知るには、残念ながらあまりにも資料が少なすぎて不可能である」^②、または「『泰西学館』が、だれによって創立されたのか、また最初の学舎がどこにあったのか、そして昭和九年（一九三四年九月二十一日…引用者）」の「第一次…引用者」室戸台風で「大正区大正橋畔（大正通一丁目二十七番地）の校舎

が…引用者」被害を蒙るまでの経過については残念ながら資料は残っていない」^③とされてきた。

そして昭和十年四月になって、大阪城東商業学校（現、大阪商業大学）理事長兼校長谷岡登氏、その実弟である谷岡琢磨理事、さらに田守金司理事の三人が室戸台風後、再建に苦慮し「名のみ」の状態になつていた泰西学館の経営を引き継ぎ、翌昭和十一年四月から上本町二丁目（現、上本町一丁目）で実践教育を中心とする各種学校としての授業を再開し、昼夜三年制のタイプ科・英語科・珠算科^④をおく実践実業学校として存続させ、昭和十四年四月には布施市御厨町（現、東大阪市御厨柴町）に移転して城東商業（現、大阪商業大学小阪キャンパス）と同居し、東館（現、研究棟）の三階を泰西学館の教室としていた。この移転により、各科は商業科（就学年限三カ年）に一本化され、



泰西学館の石札

泰西学館卒業生は大阪城東商業学校の第一本科四年生に編入学することができたので、かなり多くの生徒が入学したといわれる。学館長は、谷岡登・谷岡琢磨・田守金司の三氏が交代で務め、事務関係は奥田誠一氏から谷添惣一郎氏が担当し、昼夜の授業は、小林得一郎・柳田栄次・洪川良次氏らの大阪城東商業学校の専任教員が兼務した。

昭和十六年十二月の真珠湾攻撃によって太平洋戦争の火ぶたが切られ、戦時体制がますます強化される中で、軍工場などへの徴用のがために進学する生徒の存在を好まなかった軍部と文部省は、昭和十九年三月末、戦時学校統合令によって理科系ではない各種学校の整理統合にのり出し、泰西学館は大阪城東商業学校（第一本科は布施工業高校と改称）へ統合された。ここに明治・大正・昭和初期にわたる五

十九年間、私塾とはいえ一般中等学校教育課程を教え、当時は数少なかった公私立中等学校のかわりに、上級学校進学者を育み、官公吏・教育者・実業家などの有能な人材を輩出していた泰西学館は、その校名を石札に示すだけのものになったのであった。この古い白色の門札が、最初に述べたように大阪商業大学附属高等学校の門札と並んで、現在でも大阪商業大学の校門に「石ぶみ」として残されているのである。⁵⁾

一 茂義樹・井上琢智両氏の泰西学館研究

このように空白だらけの泰西学館研究に関しての研究状況を一変させたのが、茂義樹氏⁶⁾と井上琢智氏⁷⁾それぞれの論稿の発表であった。

茂義樹氏は、宮川経輝の日記にもとづく高橋虔『宮川経輝』（比叡書房、一九五七年）や『大阪朝日新聞』・『基督教新聞』・『大阪基督教報知』・山本泰次郎編『内村鑑三日記書簡全集』（全八巻、東京 教文館、一九六四～五年）他、キリスト教（宣教師レポート中の大阪ステーション・レポート）やミッシェン・スクール関係の資料を駆使することによって、泰西学館が小崎弘道・海老名弾正とともに日本組合基督教協会の三元老とよばれた宮川経輝⁸⁾やその妻である宮川梅花らによって明治十九（一八八六）年に引き継がれ、大阪教会（明治七年創立）を中心とするキリスト教者が主として経営と教育に参与したクリスチャン・スクールであることを明らかにした。その宮川が、泰西学館校長の職にありながら、大阪教会牧師を本職とし、梅花女学校校長や同志

社女学校教頭を兼ねており、泰西学館の学校運営は寄付と生徒の授業料のみで経営され、リベラル・アーツ的な校風に対して、決して好意的ではない感情を持っていたとされる大阪の民情では、いきおい経営は危機状況に追い込まれて行つたとされる。このような状況の中で、宮川らは良い専門教師を集めれば生徒が多く集まると予想し、キリスト教伝導者として余りにも有名であった内村鑑三⁹を招聘したのである。この招聘の直前の明治二十四（一八九二）年一月九日、第一高等中学校（現、東京大学教養学部）で教育勅語奉読式が挙行された際、講師であった内村はキリスト教の信念に従い、明治天皇の親署のある教育勅語に対する奉拝を拒み、内村を弁護した教員一人とともに不敬として職を追われた。この事件以後、天皇主義者によるキリスト教排撃の世論が高まり、井上哲次郎らによって「教育ト宗教ノ衝突」論争がひきおこされた。いわゆる内村鑑三不敬事件といわれる思想弾圧事件である。

生活苦にあえいでいた内村鑑三が、生徒を中心とする教員招聘運動によって、泰西学館に教頭（実際には教授という名称の一教師）として招かれたのは、明治二十五年九月七日のことであり、英語・地理・歴史を担当した。内村は、「清貧の典型」ともいふべき泰西学館の生徒の教育と信仰に高い評価を与えつつも、宮川をはじめとする泰西学館の運営理念に大きな違和感を持った。それに加えて泰西学館の財政悪化の問題が、翌年五月十三日付の内村辞任と熊本英学校への転任につながってしまったのである。また、泰西学館自体も明治三十一年二月

一日に宮川の手を離れ、学館第一回卒業生であった吉岡哲夫（定次郎）の経営する所となり、クリスチャン・スクールとして、教会やクリスチャンによって運営された泰西学館は、「廃止」されることになり、吉岡による非キリスト教的「東洋風」の泰西学館が誕生したのである。

以上のように茂義樹氏は、宮川経輝と泰西学館との関係にキリスト教史学からする問題関心より泰西学館を明治十九年九月の宮川による私立大阪泰西学館設立・開校と明治三十一年二月の「廃校」手続きに分析の焦点がおかれている。

それに対して井上琢智氏は、明治教育史の問題関心から、明治十八年五月に宮川の腹心として活躍する安藤乙三郎（一八五七～？）の自宅に開校されたであろう私塾「泰西学館」からの同館の学校史を『大阪朝日新聞』の「広告」や『大阪市学事統計』・『大阪府学事年報』や谷岡学園「泰西学館」関係資料を駆使することにより、可能な限り、その全体像を明らかにした。それによって、移転を繰り返した泰西学館の所在地を、北区中之島五丁目十七番地（明治十八年九月）↓川口居留地二十一番地（明治二十年八月）↓梅田停車場東道〔桜橋筋〕（明治二十一年八月）↓西区江戸堀北通四丁目（明治二十七年八月）↓西区靱上通二丁目（明治二十九年八月）↓大正区大正橋畔〔大正通一丁目二十七番地〕（昭和六年五月）↓上本町二丁目（昭和十年四月）↓布施市御厨町（昭和十四年）と確定し、学科開講科目及び定員について詳細な究明と言及とを行なわれている。

特に吉岡哲夫が引き継いだ「泰西学館」が夜学を中心とした分校（南区竹屋町八幡筋）を明治三十三年に設立したこと、早稲田大学及び関西大学への無試験入試の資格を得たこと（また卒業生のヒアリングによれば、神戸高等商業学校（現、神戸商科大学）や大阪高等商業学校（現、大阪市立大学）の予備校的な位置付けであったとされている）、英語教育を主流にしながら、タイプライター科など時代の要求に対応できる学科を新設し、各種学校としての性格を強化していったことを明らかにされたのである。

また大正期以降は経営が極めて困難になるとともに、「全くの寺子屋的な和（私の誤りか：引用者）塾」¹⁰になっていったこと、昭和に入つて吉岡哲夫氏から門田姜生氏（昭和五年）、つづいて金子莊太郎氏（昭和六年、この間に大正中学校への改称がある）に経営が引き継がれ、昭和九年九月の第一次室戸台風によって校舎が全壊、谷岡登氏に経営が委ねられることによって『谷岡学園五十年史』の記述につながる前史を見事なまでに実証されたのである。

二 文学者系卒業生——敬天牧童・前田林外

本節では、以上に述べた茂義樹・井上琢智両氏の研究を進めるべく、両氏が明らかにされた泰西学館卒業生の他に、文学者として活躍した卒業生を紹介してみよう。

茂・井上両氏が確認した卒業生は、第一回／中島松太郎・吉岡定次郎（哲夫）〔以上、高等科〕・本田一郎・家久幾多太郎・藤本寿作・久

保徳太郎〔以上、尋常科〕、第二回／原田次郎・西山教充、第三回／竹田餘三・長野直太郎・高田増平・佐藤隆・越智春枝・立石一郎、第四回／藤本寿作・本田一郎・中村利三郎、第五回／浅田好太郎・小泉澄（以上『基督教新聞』より）、前掲『宮川経輝』では他に、杉野鉄三郎・寺田某・佐藤某・和田俊三が挙げられ、他に牧師にして教育者・市民運動家と有名な長野直一郎（波山）やのちに泰西学館の英語教師となる常名銚二郎、何よりも文学者として名高い岩野泡鳴¹¹が挙げられてきた。明らかにキリスト教的人脈で卒業生が認識されてきたのである。

本節では岩野泡鳴の文学者としての系譜から、意外とも思える二人の新しい泰西学館の卒業生を紹介してみたい。敬天牧童こと野田良治と前田林外である。まず外交官にして詩人・俳人である敬天牧童¹²であるが、明治八（一八七五）年十一月十日に丹波国（現、京都府）何鹿郡に生まれる。本名は野田良治、旧姓は今村とあった。大阪の泰西学館を経て、明治二十九（一八九六）年に上京し、東京専門学校（現、早稲田大学）に学び、翌年公使館及び領事館書記生試験に合格し、外務省に入省し外交官になる。マニラ・メキシコ・ペルー・チリ・ブラジルなどの大使館に勤務し、昭和十（一九三五）年に退官した。外交官野田良治としては、『世界之大宝庫南米』（博文館、一九二二年）・『世界之大宝庫新南米』（博文館、一九二七年）・『実査十八年ブラジル人国記』（博文館、一九二八年）・『大アマゾン』（万里閣書房、一九二九年）・『南米の核心に奮闘せる同胞を訪ねて』（博文館、一九三二年の

ち『日系移民資料集 南米編 第20巻 昭和戦前期編』日本図書センター、一九九九年に所収）・『らてん・あめりか叢書』（十一組出版社、一九四二年）・『伯国サンパウロ州農園実況』（未確認）・『ラテン・アメリカの全貌』（未確認）などの南米植民関係の書物、ポルトガル語関係の語学面での業績としては、わが国では数少ない『日葡辞典』（Vol.1 A~K 一九六三年、有斐閣）・『日葡辞典』（Vol.2 M~Z 一九六六年、有斐閣）を編纂するなどユニークな外交官として活躍した。

文学者・敬天牧童としての詩風は、泰西学館出身者としての宗教的な敬虔さで、人の心や外国の自然美などを清純な筆致で歌いあげている。詩集としては、黒田直道編『短笛長鞭』（美育社、一九〇一年）を処女詩集として、ほかには黒田直道編『青春之詩』（美育社、一九〇二年）があり、翻訳詩集として『イスパノアメリカ名家詩集 船来すみれ』（美育社、一九〇二年）がある。また、俳句の方では温雅な作風を示し、詩作とあわせて編んだ句集には『瓜の蔓』があり、昭和四十三（一九六八）年六月二十三日に死去している。

つづいて詩人として知られる前田林外¹³は、元治元（一八六四）年三月三日に播磨国（現、兵庫県）姫路城の西に位置する青山村に生まれる。本名は儀作とよび、実家は農業を営んでいた。年少の頃に修学のために上京したが、二年後には帰郷し、大阪にて泰西学館英学科に学び、在阪二年で神戸に行き、学費を貯蓄するために貿易会社に勤務すること四年、明治十七（一八八四）年あるいは十八年に貿易船に乗り込み、ニューギニアに航海する経験をした。明治二十年九月、東京

専門学校（現、早稲田大学）英語普通科に入学、明治二十三年、同校を卒業した。同年、同校に創設された英文科に再入学し、旧友の水谷不倒・金子筑水らと同人雑誌『延葛集』をもったが、翌年には中退した。さらに九段坂上の仏蘭西語専修学校や東京外国語学校露語科に学ぶこと三年、哲学館（現、東洋大学）にも仏教学を学ぶために在籍した。明治三十三年四月、与謝野鉄幹主宰『明星』創刊号の「新詩社詠草」中に短歌三首が載り、以来、社中最古参の一人となる。同年六月、詩の第一作「二種の家族」を、十一月には「黄色難」を同誌に発表する。明治三十四年七月に「アメリカ彦造の墓」を『明星』に発表し、蒲原有明ら四名と並んで薄田泣菫詩集『ゆく春』の書評を執筆、明治三十五年一月に「ほくけ鬚」、三月に「みどりの床」、四月に「素戔嗚尊を讃ずる歌」、六月に「永晝」、八月に「極楽鳥の賦」を明星に発表する。明治三十六年一月に与謝野鉄幹・平木白星と合作の叙事長詩「源九郎義経」を『明星』に連載する。前田の分担は（三）「初戀」で、五月に（六）「法鼓」、八月に（九）「腰越駅」を発表したが、予告に発表された（十二）「白模湖」は書かれずに、未完に終わってしまった。同年九月に「夏花少女」（一、二）、一〇月に「夏花少女」（三、四）を『明星』に発表したのが、「源九郎義経」に対する社中の悪評に耐えられず、東京新詩社を去っている。十一月には、泰西学館の先輩でもある岩野泡鳴・相馬御風や書家の岩田古保と東京純文社を結成し、雑誌『百合』を創刊し、「夏花少女」（一〜四）を発表する。東京純文社は、神田区三崎町三丁目一番地、湊屋の屋号で紙商を営む

自宅に置かれていた。明治三十七年五月に「夏花少女」(五、六)を、六月に「夏花少女」(七、八)、九月に「夏花少女」(九、十)を、十月に「夏花少女」(十一、十二)、十二月に「壁屋孔雀の賦」をそれぞれ『白百合』に発表する。明治三十八年一月に「夢のほのは」、二月に「白鴿に」を『白百合』に発表し、三月に第一詩集『夏花少女』(東京純文社)を刊行したのち、六月に「清十郎塚」、七月に「白象の歌」、八月に「青雀」、九月に「わが死相」をそれぞれ『白百合』に発表する。明治三十九年一月に「多情多恨」、二月に「古橋の賦」、三月に「雛遊び」、四月に「愛の屍」、五月に「社鴿」を『白百合』に発表、六月に「あやめ会」(この年三月に結成された詩人の談話会で野口米次郎が主宰する)の日英米三国会員の作品を収めた『あやめ会詩集第一 あやめ草』(如山堂書店)を刊行し、同誌に「印度哀歌」二章を寄稿するとともに、第二詩集『花妻』(如山堂書店)を刊行し、十月に「あやめ会の内情」を『白百合』に発表するが、「あやめ会」の内紛のため、林外をはじめ多くの詩人が脱退した。十一月には、『白百合』第四巻第一号を「民謡号」とし、採集した民謡を掲載し、十二月に第二「民謡号」を刊行する。明治四十年の一月から四月終刊号まで『白百合』は毎号「民謡号」となり、三月には前田林外選訂『日本民謡全集』(本郷書院)、十一月には『日本民謡全集統編』(同前)を刊行する。大正十二(一九二三)年には、林外青年期の短歌約三千首から一千首を選出、新作若干首を加えた歌集『若き心に若き印象』は、下町の印刷屋で組版中、関東大震災で稿本が焼失した。のち『野の花』

(交蘭社、一九二八年)、『極楽鳥』(若桜会、一九三六年)の二歌集を刊行するが、十五年戦争中は、戦争協力の立場から、『盧溝橋』(若桜会、一九四〇年)や『重慶の大空襲』(若桜会、一九四〇年)などを刊行している。林外は昭和二十一(一九二二)年に七月十三日、疎開先の千葉県荒明(現、成田市)で死去する。享年は八十三歳であった。

三 早稲田大学(旧、東京専門学校)進学問題

つづいて前節に述べた泰西学館の進学問題、特に大正期以降に経営が困難になってしまった原因の一端を、早稲田大学史料センターの¹⁶⁾資料を示すことによって明らかにしたいと考える。井上氏は、泰西学館が早稲田大学(旧、東京専門学校)及び関西大学(旧、関西法律学校)への無試験入試の資格を得たことを新聞記事によって明らかにされている。東京専門学校(のちの早稲田大学)への無試験入試について【史料1・2】をみてみよう。なお、この史料は、大阪泰西学館側の写しである。

【史料1】

「追テ豫テ御認可相成候写左之通附記致置候

(第一) 過般御照会相成候本大学ト連絡ノ儀相承致候

即チ左通取計申度候間御承知相成度候也

- 一 貴館本科普通科卒業ハ本大学専門部各科第一年及(二種生)へ無試験入学ノ事高等豫科第一種(二種生)へハ英語ノ学力詮衡ノ上入学ノ事

明治四十一年八月廿六日

早稲田大学々々長 法学博士 高田 早苗

大阪泰西学館々々長 吉岡 哲夫殿（大阪泰西学館野線用紙）

【資料2】

「其後英語ノ詮衡ヲモ畧シ全然無試験トセラレシ事ヲ交渉シタル結果左ノ通（種々ノ手続ヲ経タル後）

（第二）曩ニ御照会相成候趣 詮衡候処貴学館普通科卒業ニ限り本大学左記学科へ無試験入学の儀承知致候間 左様御了知相成度此段及御回答候也

早稲田大学 印

大阪泰西学館御中

左記

専門部及高等師範部第二部各第一学年

高等豫科（理工科豫科を除く）第一学類

高等師範部第一学類

以上

大正三年四月十五日（大阪泰西学館野線用紙）

以上のように、明治四十一年（一九〇八）年八月段階で、早稲田大学々々長 法学博士 高田早苗名で大阪泰西学館々々長 吉岡哲夫宛へ「〔泰西学館：引用者〕普通科卒業ハ本〔早稲田：引用者〕大学専門部各科第一年及（二種生）へ無試験入学ノ事 高等豫科第一種（二種生）へハ英語ノ学力詮衡ノ上入学ノ事」が認められており、大正三（一九

一四）年四月段階においては、「〔泰西学館：引用者〕普通科卒業ニ限り本大学〔早稲田：引用者〕左記学科へ無試験入学の儀承知致候」と「専門部及高等師範部第二部各第一学年」・「高等豫科（理工科豫科を除く）第一学類」・「高等師範部第一学類」の三学科の入学を認めるとする。前節で紹介した敬天牧童・前田林外の兩名は、以上のルートを切り開いた卒業生といえるであろう。

無試験入試は、この後もつづいたようだが、「青天の霹靂」ともいえる早稲田大学教務課からの通知が大正七年二月二十日付で泰西学館に送られてきた。すなわち早稲田大学無試験入試の撤廃通知である。これに対して【史料3・4】の大阪泰西学館長 吉岡哲夫の照会文が送られる。

【史料3】

「照第二一八号

早稲田大学教務課御中

大阪泰西学館長 吉岡 哲夫印

本月二十日宛ノ御回答通読致候却説無試験入学ノ御取計ヲ受クルニ至リタルハ一朝一夕ノ事ニテハ無之幾多ノ年月ト交渉ヲ重ね御詮衡ノ結果認可サレタルモノニ御座候 然ル処学則ノ変更ノ結果トハ申スモノノ何等ノ豫告モナク為念ノ通牒ニ對シ新学年入学ノ間際ニ如各認可取消ノ御取扱ヲ蒙ルハ如何ニモ迷惑ニ感シ候 又本館ハ学生ニ對シ其面目ヲ失スルコト不尠 誠ニ遺憾之極ニ存候 就テハ更ニ御詮衡ノ上何卒従来ノ通り洩談無試験入学ノ儀御

許可被成下度懇願ニ不堪候 右御願方 特ニ得貴意候 敬具
 大正七年二月二十二日」(大阪泰西学館野線用紙)

【史料4】

「照第二二九号

二十六日附御回答落手 委細了承候 就テは貴大学新学則ニ基
 き本館優等卒業生は無試験にて入学許可相成候事と承知致候 此
 儀為念得貴意候 敬具

泰西学館長 吉岡 哲夫印

早稲田大学教務課御中

大正七年二月廿七日

(欄外) 二月二十六日回答」(大阪泰西学館野線用紙)

吉岡は、早稲田大学への「無試験入学ノ御取計ヲ受クルニ至リタル
 ハ一朝一夕ノ事ニテハ無之幾多ノ年月ト交渉ヲ重ネ御詮衡ノ結果認可
 サレタルモノ」であることを強調し、「貴大学新学則ニ基き本館優等
 卒業生は無試験にて入学許可相成候事と承知致候」と無試験入試に固
 執している。しかし、泰西学館に対する早稲田大学側の回答が【史料
 5・6】である。

【史料5】

「大阪泰西学館長宛回答

本月廿六日附照第二二九号を以て御照会相成候趣の處 貴館優
 良卒業生ハ検定の上 無考査にて本大學各豫科に入學許可を可致
 候 右検定標準ハ大約先の通に有之候間其邊併せて御了致相成度

此段及御回答候也

教務課

記

其考査検定標準

一 高等豫科(第五部を除く)にハ卒業生総数四分の一以上の者
 に就き

一 高等師範部豫科にハ同十分の一以上の者に就き其考査検定を
 行ふ

大正七年二月廿八日

但當該年度及本年度卒業生に限る

右其考査標準ハ本大學各内規ニ有之候間 他ニ必ず御洩しなき
 様願上候」(早稲田大学野線用紙)

【史料6】

「二十二日附御照会有之候件ニ就回答 今年年ヨリ如何ナル中等
 学校卒業生ニ対シテモ一般ニ学力考査試験ヲ行フ事ニ相成候為
 中學校卒業生ノ受ク可キ試験丈ハ貴館普通科卒業生モ受験ノ上入
 學セシムル事ニ決定セシ次第第二御座候又タ何等予告モナク為念ノ
 通牒ニ対シ云々ト御書面ニ相見工候がコレハ丁度前回御照会有之
 候節ハ尚試験有無ハ審議中ニ有之 其後兩三日後ニ至リ御回答致
 候儀ニ有之候間 此邊ノ事情 篤ト御了知被下度 右御回答申上
 候也

大正七年二月廿九日

回答（欄外）（早稲田大学野線用紙）

以上のように「今年ヨリ如何ナル中等学校卒業生ニ対シテモ一般ニ学力考査試験ヲ行フ事ニ相成候為 中學校卒業生ノ受ク可キ試験丈ハ貴館普通科卒業生モ受験ノ上入學セシムル事ニ決定セシ」という回答を送り付けてきた。早稲田大学無試験入試の特権を奪われた泰西学館が上級学校進学コースとしての中等学校としての位置付けをなくしたとき、泰西学館は、神戸高等商業学校や大阪高等商業学校の予備校的な位置付けとなるか、タイプライター科など時代の要求に対応できる学科を新設し、各種学校としての性格を強化するかの二者択一が迫られたのであろう。泰西学館は金子莊太郎経営の時代に大正中学校への転換をはかるが、これも第一次室戸台風という自然脅威の前にあつてなく潰されてしまったのである。

四 融和的部落解放運動への間接的影響

泰西学館卒業生には、水平的部落解放運動の相対的な見直しの中で、新たな評価を与えられつつある融和的部落解放運動の推進者として三好伊平次^⑤の存在がある。三好は明治六（一八七三）年十二月二十日、岡山県和气郡泉村（現、和气町藤野）の被差別部落に生まれた。実家はかなりの地主で、父は茂次郎、母は伊沢氏の娘、伊平次はその三男であった。五才の頃から漢学を学び、郷里の野吉高等小学校をずば抜けた成績で卒業した。明治二十五年、大阪の泰西学館に入学、英語を学んだ。ここでも待ち受けていたのは冷たい差別と屈辱であった。

三好はこれらの屈辱をじつとかみしめながら、わきめもふらずに勉強し、当時の自由民権、人間平等の思想を身につけたとされるが、これは彼の死後に書かれた伝記の記述であり、三好自身の発言ではない。逆に、大阪時代の人脈と泰西学館で学んだ学問とが、三好の融和運動にとって、少なからぬ影響力をもち得るのである。

郷里にもどった三好は、明治二十八年には「終身社」という青年団をつくり、推されてその社長となり、九年間心身鍛練と風紀の改善に努力し、また区長として地区民の生活改善・地位の向上に、家業を忘れて献身した。三好の言葉を借りれば、「同村青年の自覚と訓練に着手」したのである。さらにこの運動を岡山県全体に広げ、明治三十五年八月七日に、岡山市外常福寺で「備作平民会」を結成し、その総務となる。これこそ、部落民が団結し、自らの力で差別をなくそうとした日本で初めての組織として特筆されるべきものといわれる。翌年七月に、大阪の土佐堀青年会館で全国各地から、部落の有志四〇〇人名が集まり「大日本同胞融和会」が結成された。三好はその幹事として、全国運動を展開し、『朝日新聞』・『毎日新聞』・『山陽新聞』・『中国新聞』・『備対新聞』等の各新聞紙上で、部落差別の実情を訴え、与論の喚起を促した。

さらに三好は、部落の解放は社会の解放を俟たねばならないと考え、『週刊 平民新聞』（明治三十六年十一月創刊）を創刊時より購読し、平民社維持金に二円を寄付し、明治三十九年三月、堺利彦・西川光二郎ら一一九名と共に「日本社会党」の結成に参加した。この間、『週

刊『平民新聞』（明治三十七年一月八日付）においては、「藤野村の三好伊平次君は所謂新平民の部落に生まれた人で同族が被る圧制と残虐を憤り、新平民覚醒の爲め各地に遊説し、先年主唱して大阪に新平民大会を開き、現今は自分の宅に新聞雑誌縦覧所をこしらへて読書力を養はせてゐる」とその動向を伝えられている。明治四十年二月に同党が結社禁止で解散させられ、さらに明治四十三年五月、幸徳秋水等のいわゆる大逆事件以後は、社会主義との関係を断って、部落内部の自覚と生活向上に力を注いだ。しかし、明治四十四年二月、幸徳秋水の刑死後に堺利彦が秋水の記念品を数点を三好に送付していることから、三好は秋水の支援活動を担ったものと推測される。

明治四十三年には、郷里の藤野村村会議員に当選し、以後十二年間、村行政の振興、村民の生活向上と繁栄のために努力した。大正三（一九一四）年八月、日本が第一次大戦に参戦するや、岡山県下の青年同志を組織して、「岡山県青年同志会」を組織して、その総務として大正八年までその地位にあった。この間、大正七年の米騒動のあと、移住調査のため五回にわたって朝鮮の視察にでかけている。ここで三好は、たんなる民間の運動だけでは目的が達成されないことを知り、行政・教育・強化機関の方面からの積極的な施策が必要であることを痛感し、大正九年九月、岡山県庁の囑託となり、官民合同の融和促進機関「岡山県協和会」を設立した。ここで県庁の行政機関を動かして、まず官公吏、教育関係者に部落問題の重要性を認めさせ、さらに全県民によびかけ、差別撤廃・同胞融和の普及・実践に多大な努力を払っ

た。

大正十年には内務省に移り、社会課勤務部部落問題担当主事として、これまで無関心であって何らの対策もなかった中央政府にはじめて予算を計上させ、各種の調査・研究・対策など、全国的な事業の遂行と督励についての立案・実践にあたった。厚生部門の新設と共に、同省において融和事業の積極化に専念したのである。さらに大正十四年九月に全国的な官民合同の国民融和促進機関「中央融和事業協会」をつくり、その参事として事業部を担当、同和問題に関する各種の資料の出版、講習会の開催、地方融和団体の活動推進をはかり、とくに「部落問題の国策確立」と「融和事業十カ年計画」の樹立に、昭和十（一九三五）年まで全精力を注いだ。

終戦後、昭和二十一年、部落解放全国委員会が発足し、戦前の水平社と融和団体の有志が一体となって活動を再開すると、三好は中央本部顧問に迎えられた。昭和三十九年春には社会事業功労者として、勲四等瑞宝章を授与されている。晩年は、黙軒と号する俳人として過ごし、昭和四十四年一月八日に死去している。

三好の著作には、『同和問題の歴史的研究』（一九三一年）の外に『国民諸和の道』（隆文館、一九三三年）、『維新前後に於ける解放運動』（中央融和事業協会、一九二六年）、『融和事業概論 融和問題叢書 第一編』（中央融和事業協会、一九二八年、のち新版は一九三八年）、『融和論叢』（中央融和事業協会、一九二九年）、その他『藤野村誌』（一九五三年）、『万羽家文書』（一九六〇年）など十五冊あり、三好の編集にな

る『融和事業年鑑』全十六巻は、貴重な資料とされている。また多くの著作が『部落問題資料文献叢書 第六巻 同和問題』（近代文芸復刻叢書、世界文庫、一九六八年）に収録されている。

以上のように三好は、郷里の藤野村を出発点にし、備前・美作↓岡山県↓日本という外延的発展のなかで融和実現のための活動に一身を捧げ、各レベルで融和促進を目的とした団体を組織した融和運動家であり、彼自身の活動は昭和十年、六十二歳でピリオドが打たれる。十五年戦争の進展が、ある意味で三好の活動停止のきっかけともなっている。

三好の思想遍歴は、まず岡山県において盛んであった自由民権・平等思想の息吹きを受け入れ、部落改善に取り組み、やがて社会主義者へと反体制的思考を発展させながら、大逆事件を契機として、ある種の思想的転向を経て、体制内の融和活動家となったとされた。これが、晩年の「勲四等瑞宝章」受理ともあいまって、三好への不当な非難にもつながっているが、事態はそれほど単純ではない。

三好の思想形成に関して『三好伊平次墓碑銘』では、「為人精敏好学」「遊浪華人泰西学館修漢洋又師事三島中最（洲の誤りか：引用者）詩弱冠」という記述がある。三好が漢学・洋学の順番で泰西学館に学び、陽明学者の三島中洲に師事していたことが述べられているのである。三島の融和思想の背景には、「知行合一」の陽明学があったといわれ、泰西学館での就学が、その一翼をなすことが刻まれているのである。

近年、被差別部落史研究者の秋定嘉和氏は、松井庄五郎・小川緑雲・岡本弥・明石民蔵・大江卓などと並び、「三好（伊平次：引用者）とか山本政夫を研究しないと戦前の政治と融和と共同体の関連はとけない……。三好は若いときには社会主義にも接近しておりましてし、左翼には反対していますが理解もあります。両方の目をもっているという点で、当時としては異色の融和主義者でした¹⁸」。そして、「融和……天皇制のもとでの『臣民』的結合ということを言うのは間違いなのかどうか。当時の『臣民』の地位はさまざま社会的差異があるわけです。特に部落問題に関していえば『臣民』的地位（平等）が実現されているのかというと、『臣民』からも排除されている現実があるわけです。そういう排除されている部落民が『臣民』になる位置づけを求めたとき、日本の社会にとってプラスの行為とどうか、少なくともマイナスの行為ではないのではないか¹⁹」とされる注目すべき提起を行っている。少なくとも、非体制／体制Ⅱ善／悪というような二分法から自由になることによって、三好伊平次らの融和運動を再評価する動きが進められていることは、今後の部落史研究に豊かな可能性をもたらすであろうことだけは間違いあるまい。

むすびにかえて

本稿は、茂義樹・井上琢智両氏の先行研究に導かれながら、幻の名門校とよばれた泰西学館について、新たに判明した卒業生（敬天牧童・前田林外・三好伊平次）の紹介と新史料の紹介とを主として行ったも

のである。

高橋虔氏による『宮川経輝』には、キリスト教徒として、その後の人生を送った卒業生の記述はあっても、それ以外の分野で活躍した卒業生の記述は、等閑視されてきたといえるであろう。しかし、泰西学館の卒業生には、「漢学者になったり、大学に進学したり教育者や官吏になったりした人も多かった」という『谷岡学園五十年史』の記述をまつまでもなく、多くの人材を輩出していた筈である。例えば、文学者としての岩野泡鳴は知られていたが、これもキリスト教の連環の中で、取り上げられてきた。文学者になった卒業生については、外交官としての野田良治の顔とともに、文学者としての顔を持つ敬天牧童がいる。前田林外については、明らかに泰西学館同窓生として、岩野泡鳴との関係がみられる。また外交官野田としての業績を追うことも、今後の課題とされよう。野田の南米移民論には、新たな興味を喚起するものがある。

さらに融和運動の重鎮として知られていた三好伊平次が、泰西学館の出身であったことは、意外でもあった。晩年の伝記作家は泰西学館時代の差別体験を三好の思想的転機と叙述するが、三好本人の記述では、大阪時代の人脈と泰西学館での就学が、大きな思想形成につながっていることが述べられているのである。英語教育のみならず、さまざまなカリキュラムを学生に提供していった泰西学館の学問的懐の広さがクローズ・アップされるであろう。

また、近年に盛んに取り組まれている学園史の編纂事業の一環とし

て、泰西学館と早稲田大学との入試協定の史料が発見されるのみならず、大正期以降の泰西学館における経営危機の背景をも、この史料から明らかにすることができたのである。同志社大学・同志社女子大・梅花女子大等のミッション・スクールのみならず、早稲田大学と同じく入試協定を結んでいたとされる関西大学の史料からも新たな発見が期待できそうである。

ところで、泰西学館は昭和十九（一九四四）年三月末、政府が戦時学校統合令によって理科系ではない各種学校の整理統合にのり出し、大阪城東商業学校へ統合され、ここに明治・大正・昭和初期にわたる五十九年の歴史を終えたとされてきた。しかし、井上氏が明らかにされたように、泰西学館のクローバーの校章は、センターの「泰」の字を「高」に変えることにより、現在でも大阪商業大学付属高校の校章となっている。²¹

また泰西学館がおかれた大阪城東商業学校東館三階は、研究棟の三階として、筆者を含めた大阪商業大学教員の研究及び教育の場として、活用されている。筆者自身が毎日のように、泰西学館の温もりを感じながら、日々の研究及び教育生活を送っているともいえよう。

泰西学館の歴史を紐解き、その史実に触れたとき、現在も大阪商業大学での学園生活を送る教職員及び学生が、泰西学館一二〇年の栄光の歴史を受け継いでいることに、誇りを持つであろうと想像するのは筆者だけのセンチメンタルな感情ではない。まさに泰西学館は、大阪商業大学の大きな地下水脈として、生きつづけているのである。

- (1) 大阪私学中高連三十周年記念誌「大阪私学中高史」編集委員会編『大阪私学中高史』大阪府私立中学校高等学校連合会、一九八一年、三〇頁。
- (2) 谷岡学園年史編纂委員会編『谷岡学園五十年史』学校法人谷岡学園、一九七八年、一六二頁。
- (3) 前掲『大阪私学中高史』三〇頁。
- (4) 前掲『谷岡学園五十年史』一六八頁、大阪商業大学附属高等学校『学校要覧』(昭和五十八年度版)、しかし『大阪市学事統計』(大阪市役所、昭和十年)によれば、本科三十名・受験科五十名・タイプライター科五十名・簿記科四十八名・商業科三十名となっている。
- (5) このような「石ぶみ」を残す私塾として、泊園書院が挙げられる。同塾は、漢学者である藤沢東巽によって文政九(一八二五)年に創設され、息子の南岳や孫の章次郎によって、昭和二十三(一九四八)年まで存続した名門塾である。明治九(一八七六)年には、大阪市東区淡路町に移転し、門下生には駐英大使・外務大臣・総理大臣などを歴任した幣原喜重郎がある。この泊園書院の「石ぶみ」が、現、北区淡路町一丁目十六番地 株式会社萬年社玄関南角に残されている。
- (6) 井上琢智「大阪泰西学館小史―大阪における明治教育史の一齣―」(『大阪商業大学論集』第六十七号、一九八三年十一月)。
- (7) 茂義樹「泰西学館について」(キリスト教史学会『キリスト教史学』第三十六集、一九八二年十二月)。
- (8) 宮川経輝(一八五七年一月十七日―一九三六年三月二日)、明治・大正期の牧師。肥後国阿蘇神社の社家の生まれ。熊本バンドの一人。同志社英学校卒業後、同志社女学校教頭に就任し、四十三年間務めた。既述した小崎弘道・海老名弾正とともに日本組合基督教協会の三元老とよばれた。
- (9) 内村鑑三(一八六一年二月十三日―一九三〇年三月二十八日)、高崎藩土の子弟として江戸に生まれる。札幌農学校を卒業し、その在学中に受洗し、札幌独立教会の設立に尽くす。明治十七(一八八四)年に渡米して、アマースト大学に入学し、明治二十年に卒業する。翌年に帰国後、北陸学館の教頭などをへて、第一高等中学校(現、東京大学教養学部)の嘱託教員となったが、明治二十四(一八九一)年に教育勅語奉読式での態度を不敬と非難され依願退職に追い込まれた。明治三十年に『萬朝報』の記者となり、日露戦争に非戦論を唱える。田中正造の足尾銅山鉱毒反対運動にもたずさわ
- り、理想団の結成に加わった。翌年に『東京独立雑誌』を創刊し、無教会主義を唱えて自宅で聖書講読会を開き、多くの人材を輩出した。
- (10) 岩野泡鳴(一八七三年一月二十日―一九二〇年五月九日)、明治・大正期の詩人・小説家・評論家。本名美術。兵庫県出身。泰西学館・明治学院・専修学校・東北学院に学ぶ。詩人として出発し、浪漫的表象的詩集『悲恋悲歌』などを刊行。ついでみずからの女性関係などを描いた小説『耽溺』によって自然主義作家として認められ、『放浪』・『断腸』・『発展』・『毒薬を飲む女』・『憑き物』などの五部作を発表している。評論では「神秘的半獣主義」で独自の自然主義理論を展開し、田山花袋の平面描写にたいして、一元描写を唱えている(舟橋聖一『岩野泡鳴伝』角川選書、一九七一年。大久保典夫『岩野泡鳴の時代』冬樹社、一九七三年)。
- (11) 前掲、井上琢智「大阪泰西学館小史―大阪における明治教育史の一齣―」一五一頁。
- (12) 野田良治の経歴については、西川正人『ブラジル開拓先人伝』(日伯協会、一九七〇年、一〇九―一〇頁)、日本近代文学館・小田切進『日本近代文学大辞典 第一巻』(講談社、一九七七年、五七三頁)、パウリスタ新聞社編『日本・ブラジル交流人名辞典』(五月書房、一九九六年)を参照のこと。
<http://www.cnet-ta.ne.jp/pdtdb/biography/ke.htm>
- (13) 前田林外の経歴は、『明治文学全集 60 明治詩人集(一)』(筑摩書房、一九七七年、四一―二頁)に多くを負っている。同書には、「夏花少女」及び「花妻(抄)」が収録されている。
<http://www.cnet-ta.ne.jp/pdtdb/biography/ma.htm>
- (14) この点、正宗敦夫『書物の王国 20 義経』(国書刊行会、二〇〇〇年)を参照のこと。
- (15) 「大正七年二月 大阪泰西学館との無試験入学不継続問題をめぐる照会・解答書」『早稲田大学三号館旧蔵資料 G 付属機関・建物・施設・土地 三四 一般文書 三四―一八』(早稲田大学史料センター所蔵文書)。
<http://www.waseda.ac.jp/archives/3kan-sub-g34.html>
- (16) 三好伊平次「荆の道五六年」(『部落』第四五号、一九五三年八月)、「三好伊平次の談話(一九六四年七月)」(『調査と研究』第九四号、一九九一年一〇月)、木村京太郎「三好伊平次先生を偲ぶ」(『部落』第二四〇号、一九六九年二月)、近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編『近代日本社会

運動史人物大事典 ④ ひろわ』(日外アソシエーツ株式会社、一九九七年、五二二頁)、『社会主義沿革(1)』『みすず書房、一九八四年。

<http://www3.gateway.ne.jp/~nyrkn/open-study/nyoshi/nyoshi04212001.html>

- (17) 三島中洲(一八三〇年十二月九日～一九一九年五月十二日)、『幕末～明治期の漢学者。名は毅、字は遠叔、通称は真一郎、別号は桐南・絵莊。備中国(現、岡山県)に生まれ、山田方谷・斎藤拙堂に師事する。二十八歳で昌平黌に入り、佐藤一斎・安積良斎に学ぶ。一八五九(安政六)年に備中松山藩(現、岡山県高梁市)有終館の学頭となる。明治維新後は、司法官をへて明治十(一八七七)年に漢学塾二松学舎を創設し、東京高等師範・東京帝国大学古典科でも教えた。東宮侍講・宮中顧問官などを歴任した(三島正明『最後の儒者 三島中洲』(明德出版社、一九九八年)を参照のこと)。

- (18) 奈良人権・部落解放研究所編『日本歴史の中の被差別民』新人物往来社、二〇〇一年、一三八頁。

- (19) 同右、一四四頁。

- (20) 前掲『谷岡学園五十年史』一六三頁。

- (21) 前掲「井上琢智」大阪泰西学館小史「大阪における明治教育史の一齣」一四八頁。

〔付記〕

本稿を執筆するにあたって、早稲田大学史料センター・大阪府立中之島図書館及び片野眞佐子・飯田耕二郎両先生並びに小田忠・中嶋久人・後藤郁夫諸氏にお世話になった。さらに故小林得一郎先生(前、谷岡記念館長)には、前稿「二宮金次郎像に関する一考察―明治天皇御用品から谷岡記念館まで―」(本誌創刊号、二〇〇一年三月)と同じく、ご生前に泰西学館教員時代の思い出話を伺うことができたことが、本稿執筆の動機になっている。先生の御霊に感謝申し上げます。

また本稿は、平成十三・十四年度文部科学省科学研究費補助金(A)「近代日本の都市社会構造の総合的研究―都市諸階層の生活実態と社会関係を基軸として―」(代表・広川禎秀大阪市立大学文学部教授)

に関わる研究である。